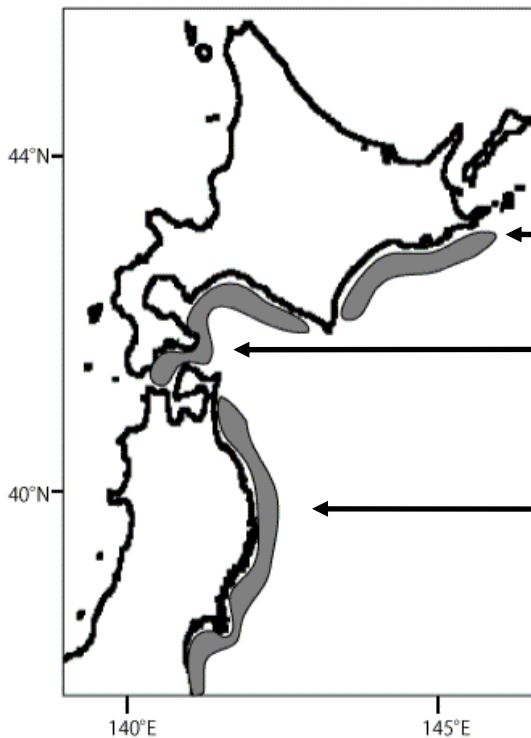


平成25年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成25年7月～9月)のポイント

常磐～道東太平洋の北部太平洋海域におけるスルメイカの
来遊量は全体としては前年を下回る。



道東太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年並み。

津軽海峡～道南太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年より小さい。

常磐～三陸海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年より小さい。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 新村、影沼澤

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所 業務推進部

担当：野上、秋山

電話：011-822-2131、ファックス：011-822-3342

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://hnf.fra.affrc.go.jp/>

平成 25 年度 第 1 回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2013年7月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域。

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網。

対象魚群：冬季発生系群（2013年級群）。

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より小さい。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：津軽海峡周辺が主な漁場となる。
- (3) 魚体：前年より小さい。

3. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：漁場形成は前年より早い。
- (3) 魚体：前年並み。

今後の見通しおよび漁況の経過（2013年5月～6月）についての説明

(1) 今後の見通しの説明

2013年6月までの漁況の経過、5月下旬～6月上旬に実施された新規加入量調査の結果、5月下旬～6月中旬に実施された漁場一斉調査の結果を主要な情報として、本予報対象期間である7月～9月における来遊量を予測した結果、常磐～道東太平洋の北部太平洋海域における7月～9月の来遊量は概ね前年を下回ると予測された。各海域における予測を以下に示す。

・常磐～三陸海域での漁獲対象資源は太平洋沿岸域を北上する群を主体として、津軽海峡から回遊する日本海由来の群が含まれると考えられる。三陸周辺海域（41°N以南、143°E以西）における漁場一斉調査でのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は前年を下回ったことから、太平洋沿岸域を北上する群の来遊量は概ね前年を下回ると判断される。一方、津軽海峡からの来遊量は、前年を下回ると予測される（後述）。以上のことから、常磐～三陸海域への来遊量は前年を下回ると予測される。魚体サイズは、漁場一斉調査およびカレイ類・マダラ0歳魚分布調査の測定結果から、前年（モード、8月19cm、9月20cm）より小型の個体が主体と考えられる。

・津軽海峡～道南太平洋海域での漁獲対象資源は、太平洋沿岸を北上する群を主体として、津軽海峡から回遊する日本海由来の群が含まれると考えられる。津軽海峡東口周辺海域（41°N以北、143°E以西）における漁場一斉調査でのCPUEは前年並みであった。また、前述のとおり、太平洋沿岸を北上する群の来遊量は前年を下回ると予測される。津軽海峡西口周辺海域における調査船でのCPUEは前年を下回り、函館港に水揚げされた小型いか釣り漁業によるCPUEは前年並みであったことから、日本海由来の来遊量は前年を下回ると予測される。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測される。なお、2012年には浦河沖に漁場が形成されたが、本年の北上暖水の張り出しは襟裳岬以東に伸長しており（平成25年度東北海区海況予報 第2号 北海道区水産研究所、東北区水産研究所）、浦河沖に漁場は形成されにくいと考えられ、津軽海峡周辺が漁場の中心になると考えられる。魚体サイズは、水揚げ物のサイズ組成から、前年（8月19cm、9月21cm）より小型の個体が主体と考えられる。

・道東太平洋海域に來遊する漁獲対象資源は、沖合域を北上する群と考えられる。漁場一斉調査における沖合域（143°E以東）でのCPUEは前年を下回ったことから、道東太平洋海域へのスルメイカの来遊量は前年を下回ると予測される。既に釧路港において水揚げされたことと、釧路南東沖に暖水塊が形成され、今後も残留すると予測されていることから（平成25年度東北海区海況予報 第2号 北海道区水産研究所、東北区水産研究所）、道東沿岸域への北上回遊時期は前年より早くなると予測される。魚体サイズは、漁場一斉調査の結果から、前年（8月18cm、9月21cm）並みの大きさの個体が主体になると考えられる。なお、根室海峡～オホーツク海への来遊時期は、例年通り10月以降になると予測される。

(2) 調査結果

A：漁場一斉調査

1) 太平洋第1次漁場一斉調査

5月下旬～6月中旬に太平洋で実施された漁場一斉調査（釣り）の結果、調査海域全体の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.22尾であり、前年（0.50尾）を下回った（図1）。

三陸周辺海域では0.08尾であり、前年（0.60尾）を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域では前年は漁獲がなく、本年は少ないものの、漁獲があった（0.02尾）。沖合域では0.33尾であり、前年（0.58尾）を下回った。

漁場一斉調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成は、モードが15cmにある単峰型の組成で、前年（16cm）より小型であった。海域別にみると、三陸周辺海域のモードは15cmにあり、前年（16cmと18cm）より小型であった（図2）。沖合域のモードは15cmで前年（15cm）と同様であった。津軽海峡海域のモードは14cmであった（前年は採集なし）。

2) 日本海漁場一斉調査

6月下旬～7月上旬に日本海で実施された漁場一斉調査の結果、津軽海峡西口周辺海域（39°N～42°N、138°E～140°E）における平均CPUEは9.5尾であり、前年（12.8尾）を下回った。

B：新規加入量調査結果

5月下旬～6月上旬に実施された常磐～三陸周辺海域および沖合域における新規加入量調査（表中層トロールネット）の結果（図3）、外套背長5cm未満のスルメイカの平均漁獲尾数（30分曳網当たり漁獲尾数）は7.7尾で、前年（26.9尾）を下回った。予測期間内に漁場への加入が見込まれる外套背長5cm以上の個体の平均漁獲尾数は5.6尾で、前年（7.3尾）を下回った。外套背長5cm未満および5cm以上の個体とも、150°E以東における漁獲量が多く、沖側に分布する傾向が見られた。

新規加入量調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成のモードは1cm～4cmにあり、前年（1cm）より大型であった。

C：その他の調査

6月の若鷹丸によるカレイ類・マダラ0歳魚分布調査（着底トロール網）で、仙台湾において漁獲されたスルメイカの外套背長のモードは16cmで、前年（15cm～17cm）より小型個体の割合が多かった（図2）。

(3) 近年の資源および漁獲状況

太平洋海域で漁獲されるスルメイカの主体は、冬季発生系群であり、これに秋季発生系群の一部が含まれる。太平洋海域における資源水準を漁獲量の動向から判断すると、1970年～1980年代は低位水準で推移し、1989年から増加に転じ、1996年（年間漁獲量：27万6000トン）が最も資源水準の高い年となった（図4）。1990年以降は高位から中位水準で推移しており、直近2年の漁獲量は2011年に大きく増加したが（16万4000トン）、2012年には減少した（9万9000トン）。

主漁場は常磐以北太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域と津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域に区分される。2012年7月～9月の常磐以北太平洋海域での漁獲量（生鮮）は4万1000トンであり、常磐～三陸海域では1万4700トン、津軽海峡～道南太平洋海域では1万3800トン、道東太平洋海域では7800トン、太平洋のそれ以外の海域では250トンであった（図5）。なお、近年（2008年～2012年）の漁獲量のピ

ークは10月～11月である。

(4) 2013年の各海域の漁況経過（5月～6月）

各地域での漁況経過を表1に示した。2013年5月～6月の太平洋沿岸主要港での水揚げ量（生鮮：速報値、一部未集計）は618トンで、前年（851トン）を下回った。三陸海域南部～常磐海域の5月～6月の主要港での水揚げ量は51トンで前年（144トン）を下回った。三陸海域北部の5月～6月の主要港での水揚げ量は434トンで前年（485トン）並みであった。津軽海峡～道南太平洋海域の水揚げ量は134トンで前年（222トン）を下回った。

表1. 漁況経過（2013年5月～6月、一部未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	釧路港において7月16日に初水揚げがあった（前年よりも7日早い）。
北海道 道南	6月における函館港での釣りによる水揚げ量は130トンで、前年比88%であった。CPUEは前年比88%であった。
青森	6月の白糠港への釣りによる水揚げ量は33トン（前年比61%）であった。CPUEは前年比57%であった。6月の八戸港の釣りによる水揚げ量は0.23トン（前年比3%）で、CPUEは前年比16%で、6月25日に初水揚げがあった（前年よりも2日早い）。6月の大畑港の釣りによる水揚げ量は0.5トンであった。
岩手	6月の主要7港による水揚げは、底びき網による漁獲が6トン（前年比162%）、定置網による漁獲が152トン（前年比167%）、釣りによる漁獲が0.1トン（前年比5%、CPUEは39%）であった。
宮城	6月の主要10港における水揚げは、底びき網による漁獲が4トン（前年比2%）、定置網による漁獲が43トン（前年比184%）であった。釣りによる水揚げはなかった。
福島	2012年9月より一部の沖合底びき網漁業による試験操業が実施されているが、この期間の水揚げはなかった。
茨城	6月の主要港における水揚げは、沖合底びき網による漁獲が2トン（前年比243%）、小型底びき網による漁獲が1トン（前年比75%）であった。CPUEはそれぞれ前年比243%、130%に増加した。
千葉	5月～6月の主要港における水揚げは、定置網による漁獲が6トン（前年比308%）で、6月の釣りによる漁獲はなかった（前年は0.1トン）。
神奈川	5月～6月の主要2港における定置網による水揚げ量（0.7トン）は前年（0.5トン）を上回った。長井港における釣りによる水揚げ量（0.3トン）は前年（0.1トン）を上回り、CPUEは前年比81%であった。
静岡	5月～6月の主要港における釣りによる水揚げ量（10トン）は、前年（9トン）並みで、CPUEは前年比82%であった。
三重	5～6月の主要港における中型まき網による水揚げ量（18トン）は前年（123トン）を下回った。

和歌山	5月～6月の主要2港における釣りによる水揚げ量（14トン）は前年（1トン）を上回り、CPUEは前年比278%であった。
高知	5月～6月の主要3港における釣りによる水揚げ量（0.07トン）は、前年（0.09トン）並みで、CPUEは前年比120%であった。

注：CPUEは1日1隻当たり漁獲量

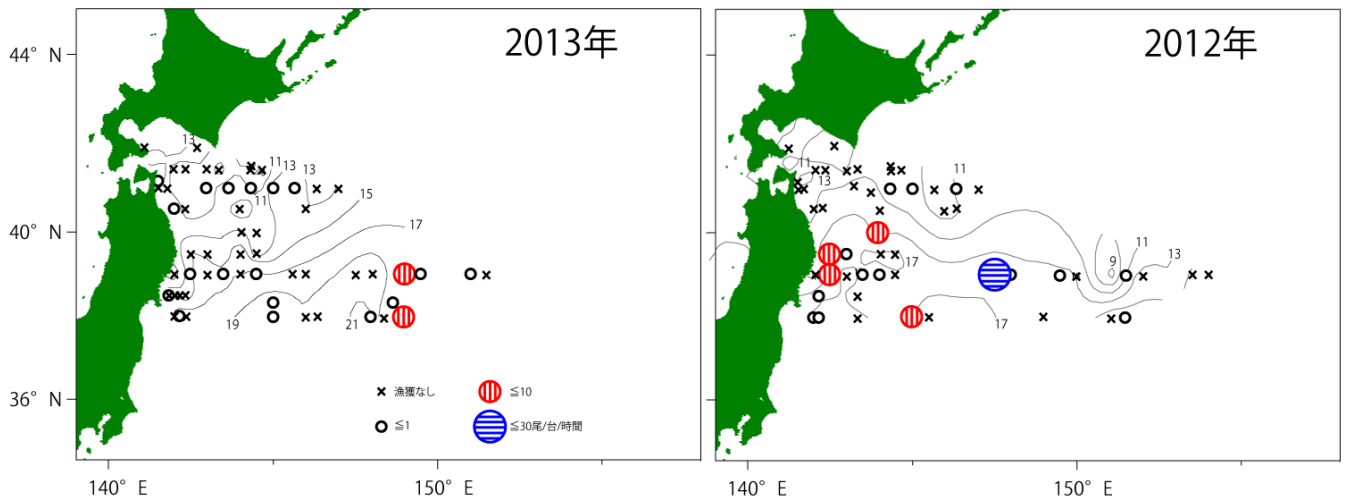


図1. 太平洋第1次漁場一斉調査の結果

2012、2013年5月下旬～6月中旬のいか釣りによるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布。×は漁獲が無かった点。実線は等温線（海面水温）を示す。

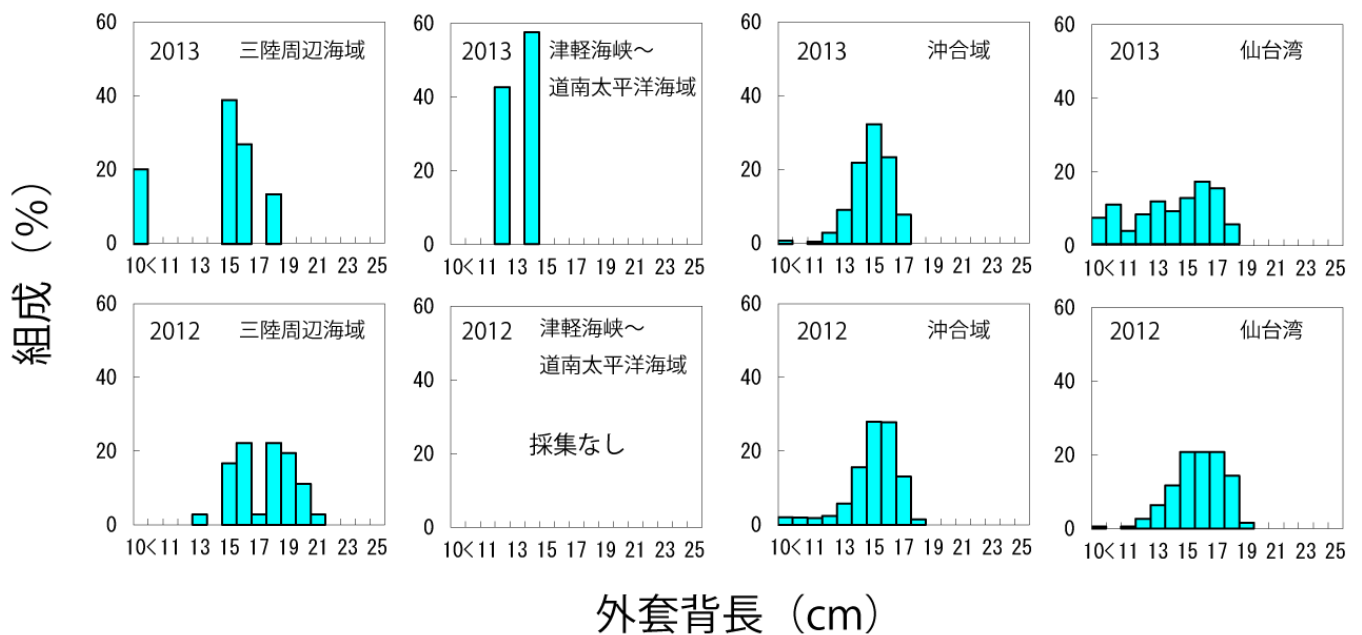


図2. 太平洋第1次漁場一斉調査（三陸周辺海域・津軽海峡～道南太平洋・沖合域）およびカレイ類・マダラ0歳魚分布調査（仙台湾）による外套背長組成の結果

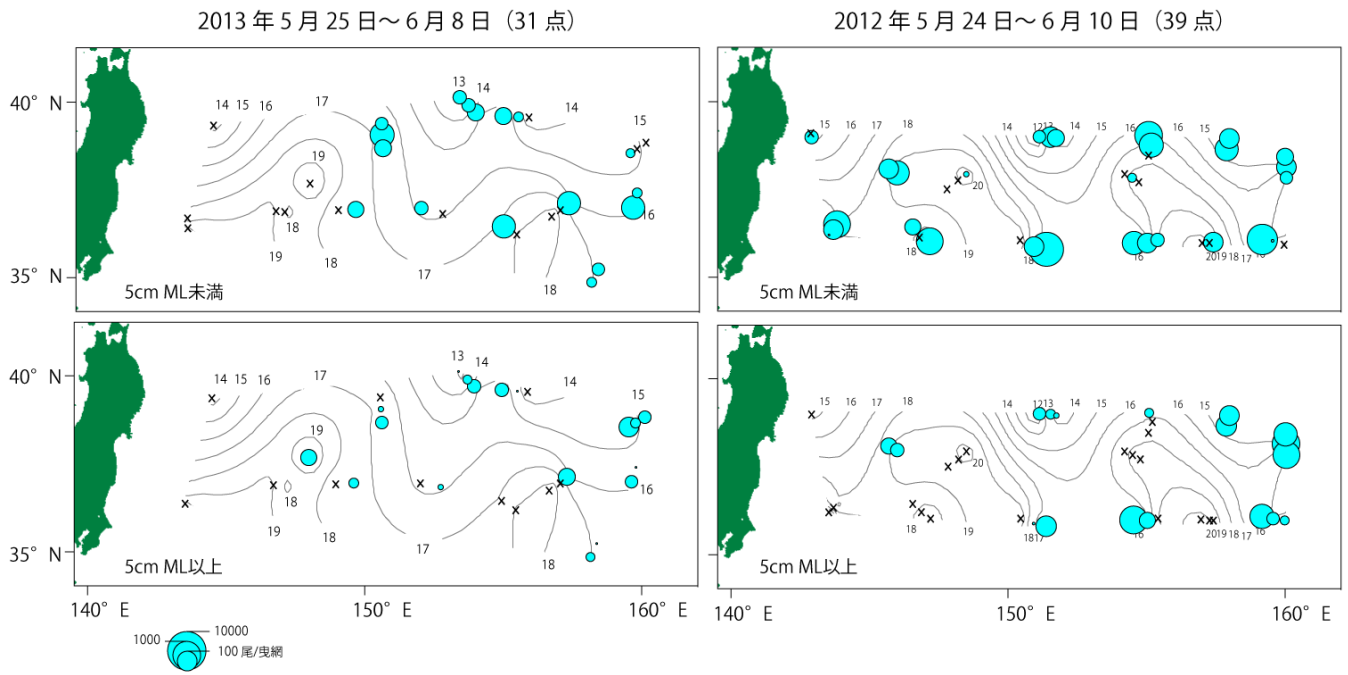


図3. 新規加入量調査の結果

2012、2013年5月下旬～6月上旬の表中層トロールによるスルメイカのCPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）の分布。×は漁獲が無かった点。実線は等温線（海面水温）を示す。

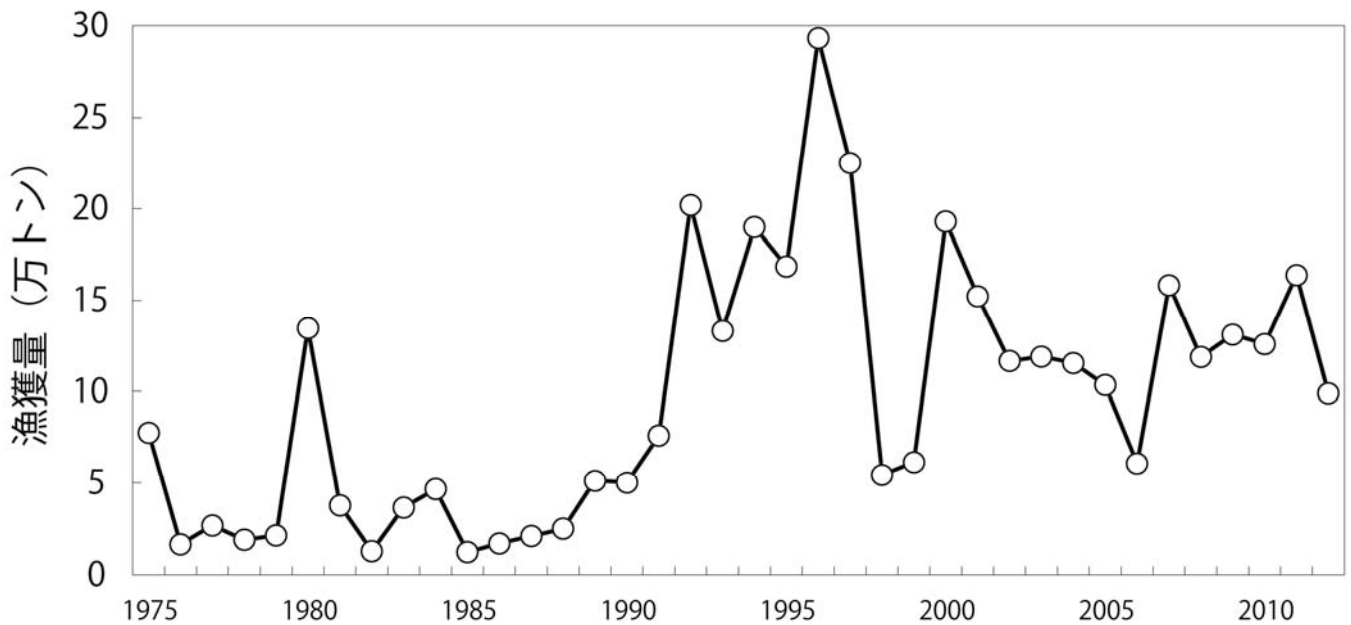


図4. 太平洋におけるスルメイカの年別漁獲量の推移
(集計値は暦年)

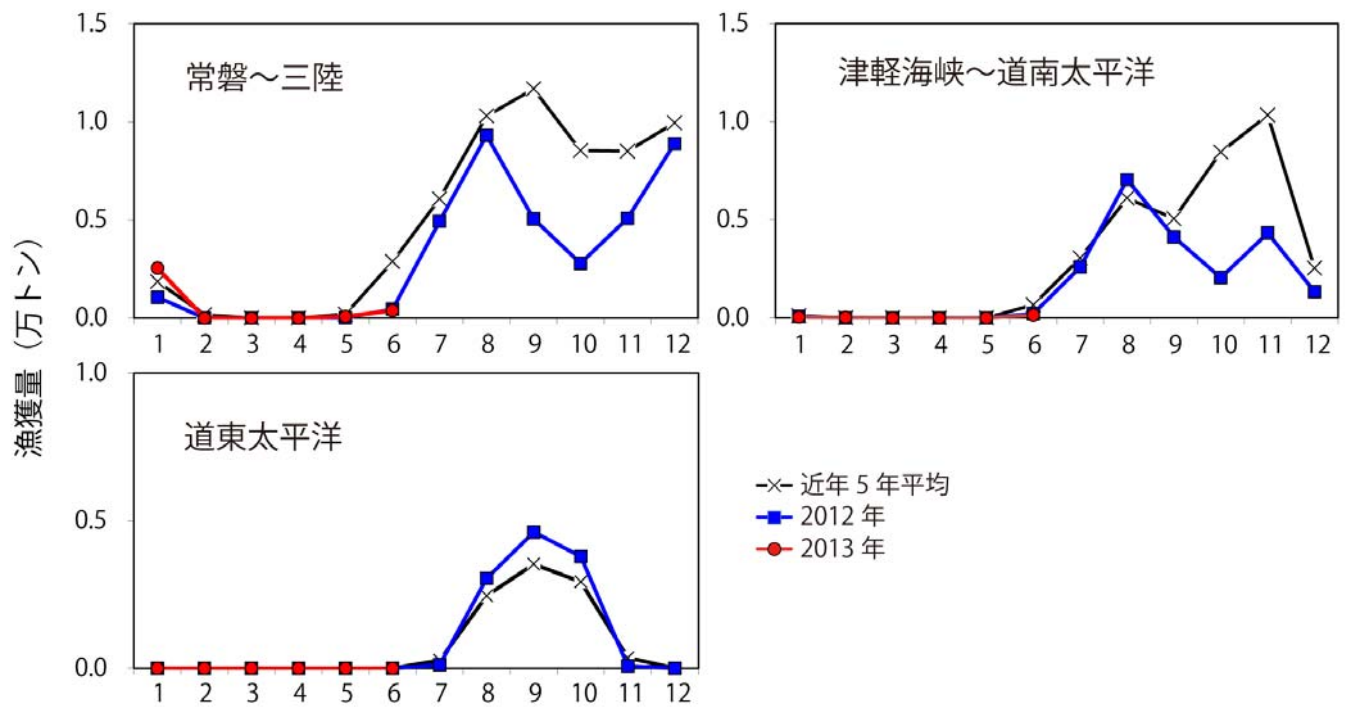


図5. スルメイカの月別海域別漁獲量（生鮮）
 近年5年平均は2008年～2012年の平均
 （釣り・定置網・底びき網・まき網）

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
茨城県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 東北区水産研究所 日本海区水産研究所 中央水産研究所
千葉県水産総合研究センター	(取りまとめ機関)
神奈川県水産技術センター	独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所
静岡県水産技術研究所	